揺れる女

戸川昌子

揺れる女

戸川昌子

© 1967
Masako Togawa
第1刷　昭和42年11月20日

定価390円

Printed in Japan
落丁本・乱丁本は
お取替え致します

揺れる女

著　者　戸川昌子

発行者　野間省一

発行所　株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21
振替　東京　3930
電話東京(942)1111(大代表)

印刷所　信毎書籍印刷株式会社

製本所　株式会社国宝社

目次

揺れる女　7
底の翳　51
うたかたの航跡　81
手首の蛇　123
嫉妬の祭り　161
水晶の中の顔　183
暗い鷗　227

装幀　山内　暲
写真　栗本信実

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

揺れる女

揺れる女

1

仕事の関係上、深夜にかかる電話は珍しくない。由香利から電話がかかってきたその晩も、私は翌朝までの締切りにせかされて机に向っていた。

受話器を取ったときの私の声は、たぶん不機嫌で冷たい響きを帯びていたに違いない。

「せんせい、あたし、由香利です。死のうと思ってるの」

青江由香利のちょっと鼻にかかった声が、睡眠薬のせいで完全に舌がもつれていた。私はまたかと思った。由香利は女流作家の私を気易い相談相手と思ったのか、今までにもしょっちゅう電話をかけてきていたのだ。

発音は不明瞭だったけれど、由香利の言葉の内容は、私にはよくわかっていた。

今までにも数度、せんせい、あたし死にたいんですという深夜の電話で、私は騙されていた。

「馬鹿な真似をしてはいけませんよ。そこにじっとしていらっしゃいね」

なだめすかしてすぐに車を走らせると、たいてい六本木とか赤坂とか、最近では原宿あたりの深夜

族のたむろしている喫茶店で、ビールに睡眠薬などを混ぜて飲み、彼女たちの言葉でいう「らりってる」状態になっているのだった。

その日、私は翌朝までの締切りをかかえていた。それもあまり筆がすすまずに苦吟している最中なのであった。

「死にたいなら、死になさい。いつもそんなことばかり言ってても駄目よ。自分のことには、もう少し自分で責任をお持ちなさい」

私は、わざと厳しい調子で叱りつけた。

「じゃあ、死にます」

受話器の向うで、ろれつの廻らない言葉が同じことを繰り返している。

「そんなに死にたいなら、早く死になさいよ」

私は焦々しはじめた。いつまで甘やかしていても仕方がないと思ったのだ。こんなとき、むしろ冷たく突き放したほうが本人には効果があると、私は信じていた。

本人——青江由香利、十八歳、九州から出てきた踊り子で、現在は無職。六本木の深夜族のひとりだった。

そのときの私は、なんといい気なものだったのだろう。もう少し真剣に相手になってやるべきだったのではないだろうか。

私は受話器を置いて十分もすると、その舌たらずでろれつの廻らない由香利の声を忘れて、仕事に没頭してしまった。

翌日、由香利の女友だちの電話で起こされたときは、もう夕方近くなっていた。私は約束よりも少

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

し遅れて十時頃原稿を渡し、そのあとほっとした気持で風呂に入り、四時間ほど眠ったすえだったのだ。

「もし、もし、伊達さんのお宅ですか。あ、先生ですね、あのう、由香利っていう子ご存知でしょ」

「ええ、知ってるわよ。昨日も電話をくれたわ」

「あのね、由香利が心中しちゃったんです」

「えっ、どこで……」

相手のおろおろした声に、私は怒鳴りつけるようにして言った。

「赤坂のアパートです」

「ああ、由香利の部屋ね」

「ええ」

「相手の男のひとは」

「あたしの知らないひと」

「警察には知らせたの」

「まだ誰にも知らせていません。あたし、今日あの子と遊ぼうって約束していたから、誘いに行ったんです。そしたらあんまりガス臭いんでびっくりして……あたし、由香利の部屋の鍵、預ってたの……」

あとは泣き出して、なにも言わなくなってしまった。

「今すぐに行きますからね」

私は電話を切ると、しばらく呆然と立ちすくんでしまった。ふいに、私が由香利を死に追いやった

のではないかという自責の念に駆られてしまったのだ。
タクシーを拾って、赤坂の由香利のアパートに行きつくまで、後悔の思いで躰中をずたずたにされるような気がしていた。
なぜ、昨夜、死ねるものなら死んでしまいなさいなどと、大人気ない言葉を吐いてしまったのだろう。いくら原稿の締め切りのことで頭が一杯になっていたとしても、もっと年長者らしい言い方があったのではなかろうか。
そんなことをくよくよと、タクシーのシートに沈み込むようにして思っていたので、由香利の心中の相手にまで気を配る余裕はなかった。どうせ六本木あたりで仲良くなった、若い男の子だろうと思っていたのだ。
四、五名の同じグループの女友だちの他は、由香利の男友だちは何人と限定出来ない状態だった。なにしろ気さえ向けば衝動的に、誘われた男とどこにでも行ってしまうのだから。
そのうえ、夜になるとたいていウイスキーや睡眠薬でらりっているくせに、躰だけは大人のように発達した由香利たちに声をかける、物好きな金持ちの男たちは無制限にいたのだ。
私が由香利のアパートに着いたとき、警察はまだ来ておらず、由香利の友だちの順子が、アパートの部屋の前にうずくまるようにして坐っていた。
「どうして救急車を呼ばないの」
「だって、もう死んでるんだもの」
私の質問に、順子は不満そうに答えた。私たちの考え方の基準が、どこかで狂っているようだった。私は、そんなことを世代の隔絶だなどとは思いたくなかった。

部屋に入ると、順子がすでに窓をあけ、ガスの元栓をしめていたので、部屋の空気は新鮮なものに変っていた。そんなところは、順子の行動のほうが的確なようだった。

男が、男物の寝巻を着て寝台(ベッド)の下に俯伏せになっているのにくらべ、由香利は白いレースの沢山ついたネグリジェの上にちゃんと手を組んで、肉体的な苦しみの表情はまるで無く、微笑んでいるようであった。

私が電話で知らせたので、十分ほどして救急車が駆けつけ、警察官が続いた。

白衣の男たちが、寝台の脚下に転がっている男を仰向けにするまで、私はその男にまるで注意を払わなかった。

男が国井だとわかったとき、私は一瞬、これらすべてが非現実的な夢の中の出来事のような気がした。そしてそのあと、突然、憤りが私の躰の中で荒れ狂い、噴き出していった。

「ばか！　どうしたのよ！」

私はそんなようなことを口走りながら、国井の死体に取りすがったらしい。らしいというのは、ヒステリックに興奮して取り乱したその前後の記憶が空白になっているからだ。

私は冷たくなった国井の躰を、この男がよく不貞寝をしていたときのように、何度もゆさぶったり叩いたりした。まるで反応のないのがようやく納得できると、私は完全に虚脱状態に落ち入ってしまったのだ。

なぜ、国井が由香利と死んだのだろう——私は同じ疑問を、頭の中で幾度も幾度も繰り返した。

今になってみると、思い当るようなことが、幾つか切れぎれの記憶の断片(アマン)になって甦ってくる。

国井は、四十歳になる中年の男だった。私と躰の関係を持ち、外国の情人のような間柄になってか

ら、もう八年以上にもなる。そのあいだ、お定まりの痴話喧嘩をやり、国井が私の頬を殴ったり、私が国井を人前に出られないように、彼の手の甲をとがった爪で何条もえぐったりしたことも数知れない。

国井が妻との離婚がうまくすすまず、何度もこじれた状態になっているうちに、私がある賞をもらい、作家として自活出来るようになってきたので、いつのまにか国井との正式な結婚もそのままになってしまったのだ。

まもなく私は、それまで勤めていた商事会社の経理の仕事をやめ、文筆生活に入った。国井のほうでも、昔と違う私と結婚することに抵抗を感じたらしく、私のほうでもわずらわしい結婚生活に、今更入る気持はなかったのだった。そのくせ、今までどおりの関係が続き、国井が新しくはじめた貿易会社の資金の足しに、私の本の印税を全部渡してしまったり、中年の男女のどうしようもない関係をずるずると続けていたのだった。

「先生、由香利ったら、香水撒いて死んでんのよ。やっぱり、言ったとおりのことやったんだわ、あの子」

順子は私の醜態にはまるで無関心で、国井と由香利たちの死体が運ばれたあとでも、部屋の中を物珍らしそうに眺めていた。

私は順子の指さすほうを見た。寝台の枕もとのサイド・テーブルの上に、睡眠薬の瓶と一緒に、五オンスは入る大型の香水瓶が横倒しになっていた。

その香水瓶を見た瞬間、私の躰がまた怒りで震えた。

香水瓶は、私がパリで買った一番大切な土産品だった。〝夜の牙〟という名前や、いかにも中年女

向きの夜の匂いが好きだったし、その瓶の凝った形までがひどく気に入っていたので、蓋もあけずに鏡台の前に飾って楽しんでいたのだ。

それが、一ヵ月ほど前、私の寝室から消えた。

私の家は、どういうものか人の出入りが多い。きっと人の盗心をそそるような、そんな場所に置いた私のほうが悪かったのだろうと諦めていたのだけれど、通いのお手伝いの女の子が、自分に疑いがかかったと言って止めるような苦々しい騒ぎまで引きおこしてしまった。

国井が、由香利にやるために私の部屋から持ち出したなどと、どうしてそのとき想像出来たろう。

私の部屋から持ち出さなくても、女に贈り物をするお金ぐらいはあるのにと、私は空になった香水瓶を眺めながら腹立たしく思った。

2

由香利とはじめて会ったのは、私が××テレビの〝ショー・アンド・ショー〟のゲスト審査員をつとめたときのことであった。

エレキバンドの演奏するゴー・ゴーのリズムに合せて、カクン、カクンと肩や腰を上下させている由香利のよくしまったしなやかな姿態と、まるい顎を突き出すようにして天井からのライトを浴びた法悦に似た子供っぽい表情とに、不思議と人を惹きつけるところがあった。

その鼻の先にこまかい汗の粒が浮いて、いかにも男との営みのときの表情に似ていたのが、私の印象に残っていたのだった。

そんなこともあってか、私は由香利の踊りの組に点数を入れた。由香利たちの組を勝ちにしたのが私だけだったらしく、番組が終って控室に戻ってくると、由香利がまだ鼻の頭に汗を浮かべたまま挨拶に走って来た。

「せんせい、どうも有難うございました。ずっとまえ、××新聞の身の上相談に、お返事をもらったのがあたしの友だちなんですよ」

艶のある浅黒い素肌に口紅だけ塗った顔が可愛らしく、きちんとお辞儀の出来る娘だった。

「おや、そうなの。どんなことの相談だったかしら」

「ステージ・ダンサーになりたいけれど、義理の母が反対するっていうのがあったでしょう。先生は、好きなことならやりなさいって書いたじゃない」

由香利は、言葉尻に尻上りのアクセントをつける若い娘らしい喋り方で話しはじめた。

「ああ、思い出した。家を飛び出したっていうのだったでしょ」

私は、その身の上相談の手紙を思い出した。漢字の少ない、比較的しっかりした書体で、踊り子の採用試験に受かったのだけれど、家の者が踊り子などになるとお嫁に行けなくなると反対する、自分は踊りが大好きなので一体どうしたらいいか迷っているというような内容だった。

質問者が、継母のいる家庭に不満を持っている様子がありありと窺われたので、ステージの上で若さを試してみるのもいいでしょう、職業に貴賤はありません、欲求不満の状態で家庭を暗くするよりも、思いきって好きなことをしなさい、その代り、ステージは決して甘いものではありませんよといった月並の返事を出したのだった。

「あれからお友だち、どうしてる、踊ってるの」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c